

第32話 天慶の乱

藤原氏が天下の政治を 私 して、わが儘を極めていると、東国には 平 将門が 叛き、西国には藤原純友が乱を起こした。 武士の力をかりて、やっと鎮定したが、 その為に、この後は武士の 勢力が次第に強くなって来た。

藤原氏の政治

菅原道真が 退けられて、宇多天皇のお 志 が空しくなってからは、却って藤原氏の基礎を固めた ような結果になりましたが、さすがに醍醐天皇御一代の間だけは、摂政も関白も置かずに、御親らお政治 をなされたので、所謂 延喜の聖代で、盛んな皇室のご威光の下に天下はよく治まりました。 ところが、醍醐天皇がお崩れになって、朱雀天皇がご幼少で御位に即かれると共に、忠平がまた摂 政となって、藤原氏の 勢いは再び盛んになった。 のみならず、今は藤原氏と対抗する程の者が 全 くなってしまったので、高位高官は大抵自分達の一家で独占し、藤原氏以外の者は、たとえ皇族であろ うと、いかによい家柄の者であろうとも、藤原氏に親しまなければ朝廷に立つことは出来ないという有様 になりました。 いわば、朝廷の政治が全く藤原氏の政治のようになってしまったのです。

世の中の有様

しかし、競争者がなくなると気の弛むのが世のならいです。 彼らはすっかり安心して次第に政治 を怠り、驕りに耽って、遊び暮らすようになって来ました。 政治の中心に立つべき者がなまけていて は、どうして世の中が無事に治まる筈がありましょう。 中央政府の所在地である京都の真ん中にさえ 盗賊が横行して、家財や子供を奪って行ったり、真昼間に市中に追剥が出て、相当の身分のある人をすら 赤裸にするというような事が頻りに起りました。

況して地方は言うまでもありません。 役人の多くは不真面目で、民の事などは 全く 考えずに、唯 自分達の利益をのみ計っていたので、民はむやみに高い税金を取り立てられたり、土地や財産を奪われた りして、いよいよ生活が立たなくなると、盗みをしたり、乱暴を働いたりして、他の良民を苦しめた。 けれども、上の好むところは下にも及んで、兵士までが既に 全く 懦弱になってしまっていたので、 そういう悪者共がいかにも横行しても、これを取り締まることなどは逆も出来なかったのです。

武士の起こり

そこで、地方の有力な人々は、其の財産のあるに任せて、多くの家来を養い、弓馬などの武芸を練 って、自分の力で悪者共に対する用心をするようなことになって来ました。 これが後の世に盛んにな った武士の起こりです。

此の武士になった有力な人々のうちには、以前から其の地方に住んで、祖先以来の豪族であったもの もいますが、又、京都にいては藤原氏のために抑えられて、出世のしようがなかったところから地方に下っ て官吏となり、其の地に居ついて、次第に土地をひろめ、財産をつくったりした者も多かったのです。

第32話 天慶の乱

さて、そこにもここにも斯ういう武士の団体が出来ると、勢い彼らは互いに武力を競って、其の技を磨いたので、其の勢いはますます強くなるばかりで、今度は彼ら同士の間にも勢力の争いが起って騒動を始めたり、中にはまた政府の役人の命令を聞かず、朝廷にも叛くものさえも出て来しました。

ところが、前にも述べたように、既に政府の武官や兵士は全く物の役には立たなかったもので、藤原氏はこれを鎮定するのに、他の有力な武士の力を借りなければならなかった。

桓武平氏と清和源氏

かくしてこれを鎮定した武士の評判はいよいよ高くなり、これに従う者がますます多くなって、ついに其の勢力は抜くことの出来ないように強くなって行った。つまり藤原氏の人々が高位高官にのぼってわがままな政治をしているうちに、彼らのために排斥されて、よんどころなく地方に赴いた人々の中から、武士という一つの特別の階級が起って、其の勢力が大いに強くなった為に、今度は、あべこべに藤原氏が彼らの力に頼って其の安全を計らなければならないような事になったのです。

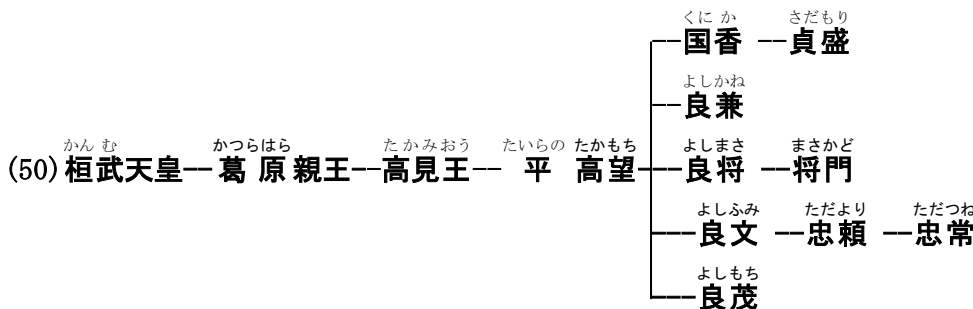
これらの武士のうちで、後の世に最も勢力を得て聞こえたのは、軍旗に赤旗を用いた桓武平氏と白旗を用いた清和源氏とであります。此の両氏が其の名を挙げた初めは実に天慶の乱の時であります。

天慶の乱

天慶の乱というのは、第61代朱雀天皇の御代に、東国には平将門が叛き、西国には藤原純友が乱を起こして、共に天慶年間に鎮定したので、此の二人の乱を合わせてそう呼んでいます。

此の二人の謀反の如きも、つまりは藤原氏のわがままを憎んだのと、一つは官兵の懦弱なのを軽蔑したところから起ったのでして、此の乱の顛末を見ても、いかに当時の藤原氏の政治が紊れていたかが分かります。

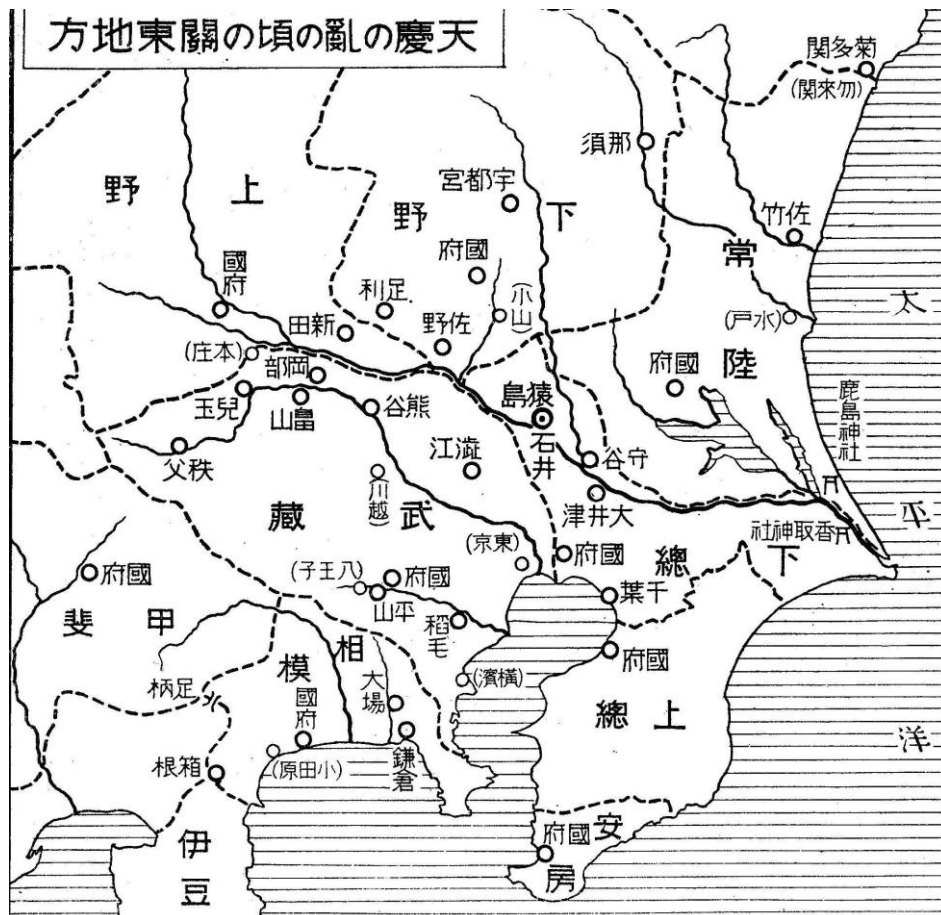
さて、平将門は桓武天皇の曾孫に当たる高望王の孫です。王がはじめて朝廷から平の姓を賜って御臣下となったのは、宇多天皇の寛平元年（西暦889年）の事でしたが、当時は既に藤原氏の勢いが盛んになりはじめた頃であり、藤原氏以外の者は、たとえ皇族からお出になった方でも、京都で高い官にのぼれる当ては殆どなかったのです。それで、上総介という役人になって東国に下り、其の地に居ついたために、子孫は多くこの地方に住んで、次第に勢力を広めはじめました。



たいらのまさかど
平 将門

まさかど たかもち
将門はこの高望の子であ
ちんじゆふ しょうぐん よしまさ
る鎮守府将軍良将の子として
しもふさ
下総（千葉県北部）に生まれた
のです。

ようしょう ちから つよ
幼少の時から力が強く、
ゆうき うま の
勇気もあった上に、馬に騎る事
ゆみ い ひじょう じょうず
や弓を射ることが非常に上手
でしたので、大いに出世をしよう
のぞ いだ はるばる
と望みを抱いて、遥々と都に
せつしょう ふじわらただひら つか
のぼって摂政の藤原忠平に仕
えていました。 けびいし
検非違使にな
りたいと思い、たびたび忠平に
ねが み
願って見ました。



けびいし とうぞく わるもの と ばつ やく ぶげい たつ
検非違使というのは京都の盜賊や悪者などを捕らえて、これを罰する役ですから、武芸に達している
まさかど とうぜん のぞ
将門としては当然の望みであつたのですが、彼が藤原氏ではなかったからか、忠平はこれを聴き届けてく
れませんでした。 まさかど ふへい お だんぜん さ しょうさ かえ き
将門はこれに不平を起こして、断然と京都を去って下総に帰って来ました。

ところが、ちょうど其のころ、父の良将が死んだあとで、其の遺した領地のことから伯父の良兼との
ふ わ かも おこ
間に不和を醸すような事が起りました。

そむ
将門叛く

それがもて、彼は頻りに身方を作って乱暴を働かし、ついには隣国の常陸大掾をしていた一
お ち くに か せ ころ
番上の伯父の国香を攻め殺しました。

それからというもの、この一族及び親戚の間に将門を相手にした争いが絶えず起り、長い間、血で
ち あら あさま たたか たたか いくさじょうず だれ てき かれ いきお
血を洗う浅猿しい戦いが戦われたが、戦上手の将門には誰も敵する者がいなかったのも、彼の勢い
ひと しだい さか み ひさ こくし めいれい けいべつ
だけが独り次第に盛んになっていきました。 これを見て、久しく国司の命令などを輕蔑していたような
らんぼう わるもの ほうぼう もと あつ き しょうこく せ あ
乱暴な悪者共が、方々から彼の許に集まって来て、一しょになって諸国を攻め荒らしました。

わけても武蔵権守であつた興世王という者などは、将門が天慶二年11月に常陸を荒らして、其の
こくふ せんりょう これちか とりこ いんやく うば ふちよう や はら しょうさ
国府を占領し、国司の藤原維幾を虜にした上、国司の印鑑（印とかぎ）を奪い、府庁を焼き払って下総
かえ く かんこ むか せ と かんとう ぜんたい ちゅう
へ帰って来ると、歓呼してこれを迎えて、「一国を攻め取っても、関東全体を攻め取っても、誅される
時には同じである。 いっそ関八州を攻め取ってはどうか？」と云って将門を唆かした。

ぶげい たつ がくもん なに どうり くら おきよ
将門は武芸にこそ達していたが、学問も何もなかったのも、道理には暗かったのでしょう。 興世王

第32話 天慶の乱

このいう事に一も二にもなく賛成して、12月11日には数千の兵を率いて下野国へ攻め入り、国司を追い払って印鑑を奪い、15日には上野の国府を襲ってここも占領した。

其の勢いは、まるで疾風のようなので、東国の国司達は一人としてこれに抵抗し得る者がいなかった。彼らは吹き巻かれる枯葉の如くに逸早く逃げ散ったのです。

偽宮を建てる

将門は全く凶に乗って、先づ部下の者を関東諸国の国司に任じたのを手始めに、自分は平新皇と称して、偽宮（偽の御殿）を下総国猿島郡石井郷（今の岩井町辺り）に建て、左右大臣以下の役人を任命した。此の時、弟の将平が順逆の理を説いて、おもむろに諫めましたが、将門は、「いや」と首を左右に振って、「おれの実力で関東を取ったのだ。たとえ都から攻めて来ても、足柄と碓氷の要害を固めて防げば負けはしない」といって聴かなかったといわれています。初めは一族の間の私闘から起こったのですが、ここに至って彼は全く朝廷に叛いたのです。

けれども、大臣以下の役人を任命した後、彼は事のここに至った顛末を備さに記して太政官に奏していますが、その中には、自分は王族であるから、関八州くらいは領地として賜ってもよいと思うというような意味もあって、関東以外の地に出てまでは乱暴を働こうとはしていなかったのです。

ですから、勿論、謀反には違いありませんが、関東の地に望みをかけただけの謀反であって、天下を争うなどしたのではなかったことは明らかです。

藤原氏の驚愕

これより先、将門の謀反を真先に京都にのぼって訴え出たのは武蔵介源経基でした。例に依って悠々と遊び戯れていた藤原氏は大いに驚きましたが、それがどれほどの程度の事ともはつきりとは分らないので、使いを出して事の真相を糺させようとしている所へ、後から後から、将門に追い払われた諸国の国司が陸續と逃げて都へ帰って来ました。そして口々に将門の暴逆を訴えました。

しかも其の時、南海、山陽の方面からは、伊予掾藤原純友が数多の海賊を率いて謀反したという知らせが来た。地方の事など全く眼中に置かず、笛や太鼓で日を送ってきた藤原一門の公家達はいかに驚愕したことでしょう！今にも関東の賊と西国の賊とが一時に都へ押し寄せて来でもするようにあわて出して、俄かに弓矢を取り出したり、刀を磨いたりしはじめました。

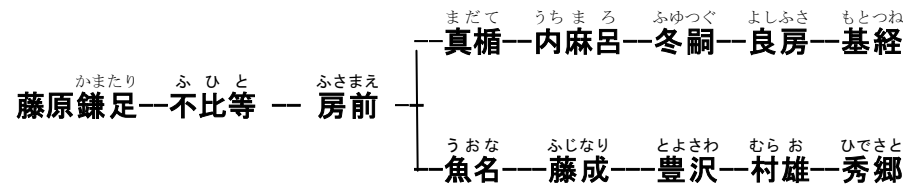
朝廷では特にお使いを伊勢の神宮にお出しになって、賊徒の平定を祈らせられた。更に藤原忠文を征東大將軍として節刀を賜い、其の弟の忠舒と源経基とを副將軍として東国へ遣わされ、又、海賊の追捕としては、大宰大貳小野好古に二人の副将をつけて、兵船二百余艘を率いて伊予へ向かわせられました。

藤原秀郷

其のころ、下野の押領使に藤原秀郷という人がいました。同じ藤原氏ですが、良房や基経などとは家筋がちがっていたので、都にいても逆も出世する当てが無く、祖父の豊沢の時代から地方に下って、

第32話 天慶の乱

すでに三代つづいて下野の役人を勤めていました。



此の秀郷は殊に武勇にすぐれ、嘗て近江の国で大蜈蚣を退治したといわれている人ですが、将門の勢いの盛んなのを聞いて、先づ其の人物を見ようと思い、或る日、猿島の偽宮に訪ねて行った。

其の時、将門は普段着のままで髪を梳かしていたが、秀郷が来たと聞くと大いに喜び、まだ結い上がらない乱れた髪の上にあわてて烏帽子を冠って、急いで面会しました。彼は秀郷が味方に来たものと早呑み込みして、嬉しさのあまりに前後を忘れたのですが、一体が粗野で武骨な男でもあったらしく、やがて食事を共にすることになった時も、膝に落ちた飯粒を拾って食べたりしました。

それやこれやの様子を見ているうちに、秀郷は、かりにも関八州を占領して、平新皇と称している者が、これはまた何という下等な事をするのであろうかと、其の人物の小さいのに愛想をつかして、却って将門を父の仇とつけてねらっている平貞盛と共に将門を征伐することとなりました。

平貞盛は国香の子です。父が将門に殺された時には京都に勤めていましたが、官を棄てて急いで国に帰って、それからというもの、父の仇を討って恨みを晴らさんものと、幾度も兵を起こして戦いました。けれども、いつも将門の勢いが強くて勝つことが出来ずにいた。それが今、秀郷が力を合わせてくれることとなったために、急に勢いがよくなって、天慶三年二月初旬に、二人は数千の兵を率いて下総の国に向かって行きました。

質は粗野でも軍は上手な将門です。将門はそれを探って知ると、直ぐに手兵を率いて逆襲して大いにこれを破ったが、二人はすぐまた陣形を立て直して、将門の先陣を破り、其の本陣をも突き崩して、逃げるを追って下総の島広山の要害に将門を囲みました。

将門 誅せらる

2月13日に最後の決戦がここで戦われました。風上から火を放ったのがうまく将門の館を焼いて、其の部下の者の家をも焼き立てたので、彼らが狼狽して逃げ出すところを、二人は非常な勢いで追撃した。

将門はさすがに勇猛な名を取った男だけに、最後まで馬首をこちらに向けて、一步も引かずに暴れまわって戦ったが、ついに貞盛の狙った矢に顛顛を射られて、馬から落ちたところを秀郷に首を刎ねられてしまいました。其の後、彼の弟らを始め、興世王らの部下も残らず誅せられて、大いに藤原氏

第32話 天慶の乱

を驚かした将門の乱もここに全く平らぎました。時に西暦940年のことあります。

其の時、征東大將軍藤原忠文の一行は、漸く駿河の辺まで来ていたが、将門が誅せられた事を聞くと、其のまま引き返して京都に帰ってしまいました。彼らは長く泰平の世の風に慣れて、所謂風流な生活を喜び、現に東国へ下る陣中でも、悠々と詩や歌などを作って、其の出来栄えを互いに賞しあっていくくらいですから。若し貞盛や秀郷がいなかったならば、或いは此の將軍達には逆も将門を誅することなど出来なかったかもしれない。いやそれどころか、却って其の上に、官兵の懦弱なのをいよいよ明らかにして、ますます将門の悪逆を増長させることになったかも知れません。

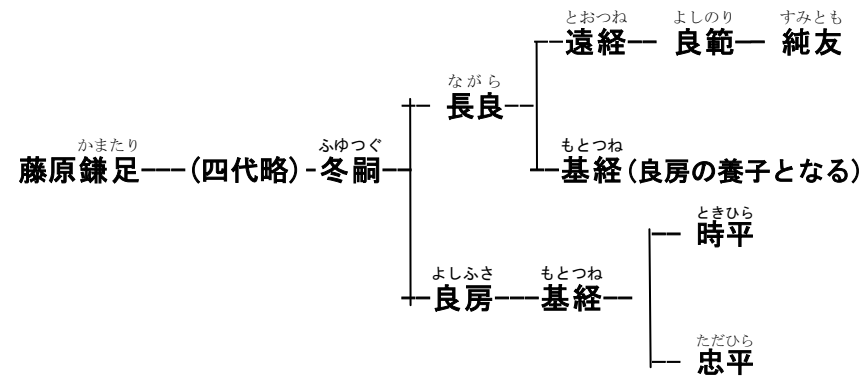
それを思うと、秀郷と貞盛の手柄は大きいのです。功によって、秀郷は従四位下に叙され、功田を賜った上に、下野、武蔵の二国の国守に任ぜられ、貞盛は従五位下に叙され、右馬助に任ぜられた。

これが実に彼らの名の現われた始めであり、又、其の子孫が大いに繁昌する基ともなったのです。秀郷は後に朝廷から正二位を贈られて、其の祀ってある唐沢山神社（下野国田沼町）は別格官幣大社に列せられています。

藤原純友

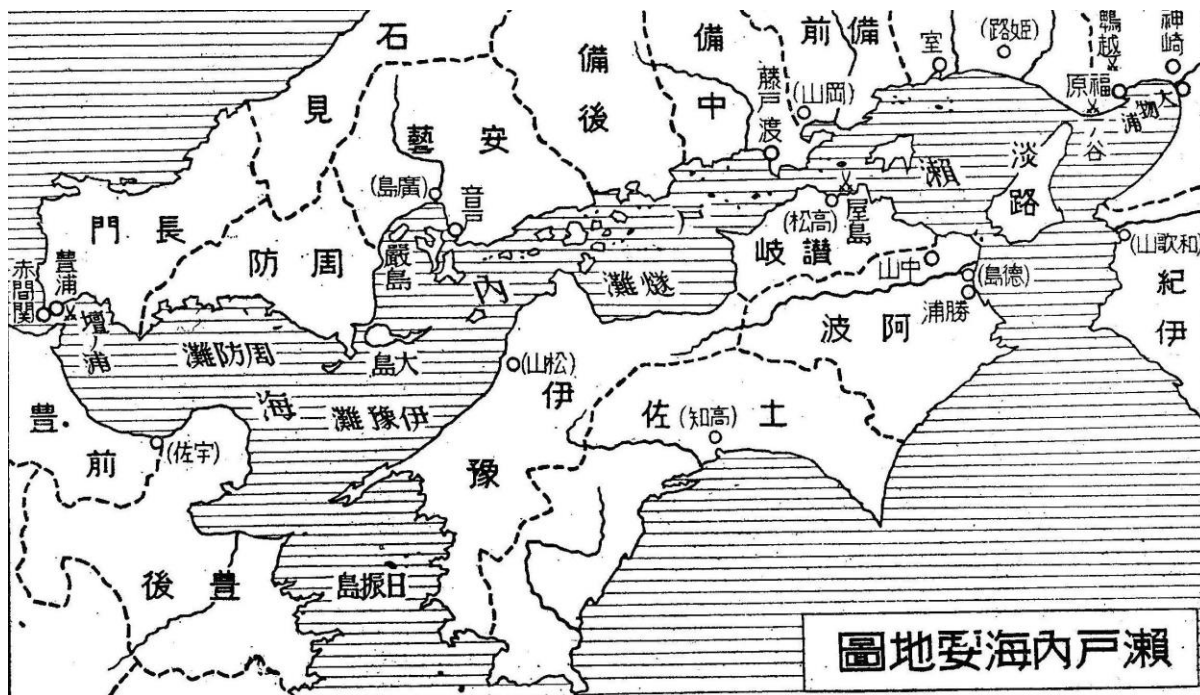
さて、斯うして東国の将門の乱は平らいだが、西国の海賊の純友は、ますます其の勢いが盛んで、容易に鎮まりそうな様子もありませんでした。

そもそも純友は、藤原鎌足の十世の孫で、長良の曾孫に当たり、藤原氏としては秀郷などより遙かに摂政関白の家に近いのですが、やはり良房や基経の直系でなかったのが、京都では出世のしようがなく、朱雀天皇の承平年間に伊予掾となって任国へ下ったのでした。



ところが、そのころの伊予の近海にはさかんに海賊が出没して、良民の財貨を奪い、女や子供をさらったりして、乱暴を極めていたので、初めは純友も他の役人らと一しょにそれを捕らえたり降したりしていました。

そのうちに純友は彼らの内幕を知るにつれて、海賊を面白い仕事と考えはじめたのと、一つは京都に帰ったところで、どのみち大いに出世する望みも無い身であることを思ったのとで、任期が満ちても京都へはのぼらずに、ついに海賊の頭となって、数多の手下を従え、伊予の日振島を根拠地として、さかんに瀬戸内海の沿岸を荒らしたのです。



それが、ちょうど天慶二年の事で、将門が関東で乱を起こしている真最中でした。さらでだに臆病神に取りつかれている藤原氏の人々などは、多分これは将門と純友が申し合わせて、東と西とで一度に謀反を起こしたのであろうと評判を立てたりしたので、京都の人々はいよいよ驚きおびえました。

藤原氏の狼狽

朝廷では、前にも話したように、東国へ征東大將軍を派遣すると共に、南海へは追捕使をお出しになったが、なにしろ賊は広い海の上を自由自在に飛びまわっているの、都育ちの役人の手になど容易につかまりません。

のみならず、純友は京都の此の騒ぎを知ると、なお其の上にも人々の心をおびえさせてやろうと思つて、ひそかに手下の者を京都にやって火を方々に放けさせたりした。そこにもここにも毎日毎夜のように火事が起つて、それが皆南海の仕業だと分かった時には、藤原氏の公卿達は全く震え上がって青くなりました。

それで、これはいっそ、純友の方は同じ藤原氏でもあるので、位を授けて心を改めさせるようにしようという事になり、そこで朝廷は彼を従五位下に叙した。海賊の頭に位を授けて其のご機嫌を取るというのは可笑しな事です、迎も征伐が出来そうにないと思つた藤原氏には、これが一番良い方法と思われたのです。

ところが、位を授けられても、純友は一向に心を改めようとしな。彼の勢いはますます振って、今は瀬戸内海の沿岸は、四国の側も、山陽道の側も、全く彼の手中に収められ、其の上、海の近くの国府などは、しばしば彼の部下の襲うところとなり、官の財物までも奪われるという有様でした。

純友が誅される

しかし、いい塩梅に、天慶三年の春になると、やっと東国の乱が平らぎましたので、朝廷では、駿河から引き返して来た源經基を更に追捕次官として南海へ向かわせられた。それで、經基は先に遣わ

第32話 天慶の乱

ついでに追捕使の小野好古と二手に分かれ、二百余艘の兵船を率いて伊予に向かいました。其の時、純友の勢はいよいよ盛んで、千五百余艘の海賊船を以ってこれを逆襲しようとしていたので、若し其のまま戦いが始まったならば、恐らく官軍は危なかったでしょう。

ところが、天罰は恐ろしいもので、いざという時になって、純友の片腕とも頼んだ藤原恒利という者が官軍に降り、賊の密かに潜伏している処からその陣立てまでを細かに訴えた上に、先に立って官軍を案内したので、純友は大いに敗れて、逃げて九州へ走りました。

やがてまた、海陸の両方面から進んで来た官軍と博多の沖で戦って、再び大いに破れ、漸く子の重太丸と共に小船に乗って、密かに伊予に戻ったところを、其の国の役人に見つけられてついに殺されてしまった。実に天慶四年7月の事で、将門が誅せられてから一年五ヶ月の後でした。

ろくそんおう つねもと
六孫王 経基

この天慶の乱の時に、先には将門の謀反を逸早く朝廷に訴え出て、後には純友の征伐に手柄を立てた源経基こそは、実に後の世に名高い源氏の始祖であります。

清和天皇の第六皇子貞純親王の御子ですから、世の人は六孫王経基と言いました。源という姓を戴いて御臣下となったのは第62代村上天皇の御代の事です、武士としての源氏の基礎を置いたのは、実に此の乱の時だったのです。

(第32話 天慶の乱終わり。 次は一旦前頁に戻り、 第33話 藤原氏の専横 へ)